

記念講演

「誰もが自分らしく生きることができる社会をめざして」

講師:栗栖 良依 氏 (認定NPO法人スローレーベル 芸術監督)

はじめに

皆さんこんにちは。認定 NPO 法人スローレーベルの栗栖と申します。

司会の方から私の大まかなプロフィールを御紹介いただいたのですが、今日は私がこれまでどんなことをしてきたのか、パラリンピックをどのように考えて、作って、そして今、新しく何をしているのかということなどを御紹介したいと思います。

先ほど、私のことをアートプロデューサーとか、アートマネジメントとか御紹介いただいたのですが、既存のジャンルの仕事をしているというよりは、自分で手探りしながらやってきた結果、今ここにいるという形なので、明確な肩書きとか役職名はないのですが、いろいろなことをやらせていただいています。



若き日の夢と進路の模索

この写真は私が二十歳のときのものですけれども、1998年の長野の冬季オリンピック・パラリンピックのときの写真です。この一つ前の大会が、1994年のリレハンメル冬季大会だったのですけれども、私は当時16歳ぐらいで、進路をちょうど

考えている時期だったのです。中学・高校と毎日学校に行っており、一応皆勤賞なのですが、ほとんど勉強した記憶がなく、部活とか文化祭などの行事とかに熱を注いでいるタイプの学生でした。

6年間、学校の中で舞台作品を年間3本ぐらい作っていたので、卒業後の進路は舞台の方に行こうかなと、漠然と考えていました。舞台といっても私は役者とかダンサーになるというよりは、どちらかといえば演出とか舞台美術とか、裏方というか全体の絵を作る方に興味があったので、そういう方向に何となく進みたいなと思いつつ、どこの大学に行けばいいのか、どこの専攻に行けばいいのかは、まだ分からなくてどうしようかなと、進路を考えていたのです。

その時に、たまたまテレビでリレハンメルオリンピックの開会式を観て、「私が作りたいパフォーマンス、ショーはこれだな」とすごく思ったのです。それはなぜかということ、子供の頃から平和活動に興味があって、「大人になったら平和に貢献できるような仕事に就きたいな」という夢も、もう一つ持っていたのです。ただ、そんなに勉強ができる方ではないですし、国連とか JICA とか、いろいろな方法での平和活動があるかもしれないのですが、自分がやれる手段は、舞台を作ることとかアートとか、そういう表現の方だなと。

その目的として平和を作るということを考えたときに、たまたまオリンピックの開会式が「平和の祭典」だということで、すごく自分の思い描くものとマッチした

のです。

さらに、年間3本の作品を作っていました。ほとんど学校の生徒たちと作っていて、いわゆる素人40人とかを束ねて作るというのが、私がやっていたことなので、プロの人が数人出てくる作品より、普段はスポットの当たらない人にスポットを当てるみたいなのが好きだったり、いろいろな人を巻き込んで作るのが好きだったりということもあって、オリンピックの開会式が自分の夢とすごくマッチしたのです。

でも、「目指そう、オリンピックの開会式の演出だ」と夢が定まったのですが、その夢を実現するには、どの大学のどの専攻に進んだらできるというものではなく、どの会社に就職したらできるというものではないので、とにかく自分の中で手当たり次第、やれることはやってきたという20代30代だったと思っています。

学びと実践

東京造形大学でアートマネジメントを学んだのにも理由があって、オリンピックの開会式はキャスト数が1,000人近いのです。8万人のスタジアムで、サッカーフィールドみたいなところがアクティビティエリアになるので、ものすごく大きい。その大きいものを作るのは、小さな舞台を作るのとは作り方とか全然違うと思ったのです。ですので、なるべくスケール感を意識しながら、私はアカデミックなバックグラウンドを選択してきました。

当時は美術大学も日本画科・油絵科・平面デザイン・立体デザインみたいに、ものすごく縦割りだったのですが、アートマネジメントが一番横断的にいろいろな分野を見られたり、社会と芸術のかけ橋になるような部分を見られたりするとい

うことで、アートマネジメントを専攻しました。

少し働いてからイタリアのミラノに留学して、デザインの大学院大学に行きました。やはりそこでもファッションデザインとか、インダストリアルデザイン、インテリアデザインなど、すごく縦割りだったのですけれども、ビジネスデザインという当時できたばかりのコースが、一番スケールが大きかった。ビジネスの仕組みをデザインするというジャンルだったのです。

開会式の演出はまさに仕組みのデザインにとっても近いので、大学と大学院で勉強しつつ、あとは実践の中で、「日常における非日常」というのをテーマにして、異なる文化の人やコミュニティーをつなげて、対話や協働のプロセスで社会変革を試みるようなテーマのアートプロジェクトを、各地で展開してきました。

私は中学生・高校生の頃から、もっと遊ると5歳ぐらいから、スケールや予算額は変わっても、やっていることは本当に変わらないと思うのです。市民参加型のエンターテインメント作品というのを作って、山間部とか過疎化の地域とか、いろいろなところに行って、地域住民の方と一緒に、要所要所にプロのアーティストとか専門家を入れながら作品を作るというようなことを、各地でやってきました。



人生の転機が訪れる

こんなことをしている中、2010年にもすごく大きな人生の転機が訪れました。それがいわゆる骨肉腫と言われる骨軟部の腫瘍が、右脚にできたことです。最初は膝の関節痛みたいな感じだったのですが、痛みが理由が分からなくて、整形外科とか接骨院とか病院を転々としていくうちに、痛みがどんどん増していきました。

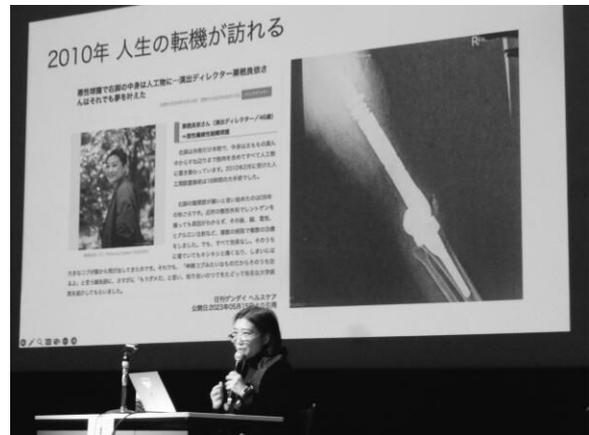
しまいには膝からコブみたいな形でポコッと出てきてしまうぐらいの状況になり、もうどうしようもなくて「これはもう大学病院だ」ということで、知り合いに紹介してもらった大学病院に腫瘍専門の整形外科の先生がいて、「これは本当にまずい状態だからすぐに入院して治療しましょう」ということになりました。

入院して抗がん剤の治療を8クールやりまして、手術も3回くらいやって、何とか命は助かったのでここにいるのですが、1年間すごく特別な時間を過ごしました。まさか膝が痛いことが、生きるか死ぬかみたいなことを考えさせられるような事態になるなんて思ってもいなくて、本当に人生観がガラッと変わったのです。

それまで私はもう16歳の頃から、オリンピックの開会式という明確な目標があって、そのために1分1秒無駄にしないぐらい、あらゆるエネルギーを注いで走り続けてきたのですが、いつ死ぬかわからないみたいな病気になったときに、何かこう「今を大事にしなきゃ」とすごく思えたのですね。

2010年は東京にオリンピックが来ることもまだ決まっていなかったので、いつ来るか来ないかわからない夢のために、今を犠牲にして無理して、嫌なことも夢の実現には必要かもしれないと思いながら、ストレスを抱えてやるよりも、今この瞬間をいかに心地よく過ごすこと、本当に

気持ち良い人たちと気持ちよく過ごすことに、エネルギーを注ぐことの大事さみたいなものに改めて気づかされた。人生観が180度転換するような、そんな1年でした。



スローレーベル 始動

もう私の右脚の中はほとんど人工物に置き換わっている状態で、抗がん剤の治療が終わった後も、去年、一昨年ぐらいにも1回手術をしていますし、2回ぐらい脚の中のものを入れ替えるという大きな手術をして、5～6年おきに定期的に手術をしているのですが、退院してこの脚の状態になったときに、障害者手帳を取得して障がい者として社会復帰をすることになりました。

やはり、それまでの働き方とか生活の仕方と大きく変わって、電車等でどこか仕事に行くというのは、結構ハードルが高いですし、街に出かけていくにしても、若いころだったら渋谷とか銀座とか人が多いところ、新宿とか電車の乗り入れの良いターミナル駅によく行っていたのですが、そういうところはもう行けなくなり、車で行きやすい場所というように、生活圏みたいなものが変わりました。

そのころ、横浜市に「象の鼻テラス」という文化観光局のパブリックスペースができて、そこを拠点に、アーティストを障がい者施設に派遣するプロジェクト

が2009年に始まったのですが、私の人生が変わるタイミングで、そのディレクターに「今の栗栖さんがすごくぴったりだから、ぜひ横浜に来てくれないか」と声をかけていただきました。それがもう社会復帰の第一歩で、その仕事に出会えてなかったら、多分、私は今こうして元気に生きていないかもしれないというぐらい、本当に救っていただいた、そんなプロジェクトです。

その場所が横浜だったこともよかったのかなと思っていまして、東京だと街の中に流れている時間のペースが多少違う感じがして、横浜というとみなとみらいをイメージされる方も多いのですが、都会ではない漁村とかもあるし、すごくいろいろな顔を持った場所だった。そして一緒に仕事する相手方が、障がい者施設の皆さんだったからということもあり、すごく温かく迎えていただいて、社会復帰がかないました。

最初は障がい者施設での、ものづくりのプロジェクトだったので、スローレーベルというブランド名を立ち上げたのですが、その後、活動がどんどん発展して、「ものづくり」から「事づくり」「人づくり」となっていき、スローレーベルという名前でNPO法人にしたのですが、活動内容はさらに広がっています。

多分、スローというのが大事なキーワードで、私が初めて障がい者施設に行くと、障がいのある人たちと一緒に活動したときに、そこでのものづくりがとてもゆっくりだったことが、スローの意味の一つでもあるのですが、ゆっくりだから駄目なのかということはないと思っています。

今、私たちはファストファッションを着て、ファストフードを食べて、ファストな世の中で生きています。ファ

ストに効率よく物事を生産的に進めていこうと思うと、やはりどうしても画一的になっていくと思うので、一人一人の個性とか違いみたいなものはどんどん消されていってしまう。それによって効率を図っていく方向に進むと思うのですが、スローでゆっくりであるがゆえに、一つ一つものづくりの表情を変えられたりとか、個性を生かすことができたりするので、スローというのは、次の時代の一つ大事なキーワードなのではないかという思いも込めて、いまだにスローレーベルの名前で活動しています。

スローレーベルは、たぶん日本一小さい認定NPO法人ではないかと私は思っているぐらい、中核になる組織はとて小さいのです。ただ関係人口は非常に多くて、プロジェクトごとにいろいろな分野の専門家がチームを作って、プロジェクトを実践していくというような、ちょっと特殊な組織形態を持った団体です。スペシャリストと言われる人たちだけではなくて、海外とのプロジェクトや子供から年配の方まで多くの市民の方と一緒に活動するような場面もとても多いです。

アクセシビリティとの出会い

そんな活動を続けている中で、オリンピック・パラリンピックの仕事に再び帰ってきたという経緯があります。突然帰ってきたというよりか、実は道筋があって、2014年に横浜で「パラトリエンナーレ」というフェスティバルを立ち上げました。障がいのある人たちと、プロのアーティストの方がコラボレーションして、新しい表現を作るというコンセプトで立ち上げたフェスティバルです。

2014年の時点では、東京でのオリンピック・パラリンピック開催が決まっていたので、ヨコハマ・パラトリエンナー

レは、横浜市と一緒に作ったオリンピックの文化プログラムというような位置付けのプロジェクトで、ここで初めてパラリンピックの開会式というものを意識しながら、障がいのある人たちとパフォーマンスアート（身体表現）というものに着手し始めました。

このパフォーマンスアートという、障がいのある人たちと一緒に舞台、身体表現をすることになったら、ものすごくたくさん課題というか壁にぶつかったのです。何かと言いますと、ものづくりとか美術の活動というのは、彼らが施設や家の中で作ったものだけが、外部に出てくると感じるんですけど、身体表現、パフォーマンスに関しては、本人自らが足を運んで、人の前に立ってパフォーマンスしなくてはいけないというところで、ものすごく大きな違いがあります。

ワークショップや作品づくりで、「障がいのある人もない人も誰でも参加できますよ」と言っても、障がいのある人が来づらいという現実がありました。それは別に会場に階段や段差が多いからとか、そういうことではないのですよね。「象の鼻テラス」はバリアフリートイレもついて、とてもバリアのない施設なのですが、なぜそこに来られないのかというと、そこに行くまでの街の中でのバリアがたくさんあるとか、そもそも障がいのない人と一緒にやるということが、心理的にハードルが高いとか、当時私たちが気づかなかった見えるバリア、見えないバリア、たくさんバリアがあったのですね。

その時に初めて私たちは「アクセシビリティ」という単語を改めて認知して、ここを徹底的にやっけてかなくてはいけないのだなというのを、すごく感じたのが2014年です。



アクセシビリティを支える仕組み

やはり障がいのある人が舞台に立って表現していると、それだけで「頑張っているね」とか「すごいね」みたいな感じで、その人の表現を「本当はどうかな」と思っているけど、障がいのある人がやっているからといって批判しづらいということがあると思います。

でも私は舞台の上に立ったら、それはもう障がいのあるなし関係なく、表現として正当に批評を受ければ良いと思っています。障がいが理由であるがゆえに、同じ舞台に立つこともできないとしたら、それはフェアな社会ではないと思うのです。なので「障がいを理由に、舞台に立つことを諦めなくても済むような、そういう環境を作りたい」「そういう環境でもって東京パラリンピックの開会式を迎えたい」と本当に思いました。

そのために何をやったかといいますと、まずは人だなと。皆さんどうしても、「障がいのある人が」とか「社会参画を」とかいうと、「うちの会場はちょっとトイレが」とか「段差が」とか、ハードの方に目が行きやすいと思うのです。そこはお金もかかったり時間もかかったり限界もあるのですが、人の力でやれることがあるのではないかと思います。私たちはアクセスコーディネーターとアカンパニストという専門家を育成するところから

始めました。

アクセスコーディネーターは、主に障がいとか福祉に関する知識がある方ですね。アカンパニストは、作品の中に入って、一緒に障がいのある人たちの安全を見守りながらパフォーマンスできる人たち。外から見守るアクセスコーディネーターと、中から見守るアカンパニスト、それから作品を演出して振付して作っていくディレクターが三角形を組むことによって、誰も見落とさない安心安全な環境を作る仕組みを開発しました。

先ほどビジネスデザインが私のバックグラウンドですと言ったように、仕組みをデザインするというのが、私の専門分野の一つにあるので、そういう仕組みを作って環境を変えていこうとしました。

舞台パフォーマンスをやるというと、どうしても怪我がないか、事故がないかという方に目が行きがちだと思うのですが、もちろんそこは絶対に起こさないようにしなければいけない。でも起こさないようにするためには、まずは心理的安全な環境を確保することが大事だと思っています。

何に困っているのかとか、何がつらいのかとか、怖いのかとか、何がやりたいのかとか、自分の気持ちとか想い、感じていることをちゃんとコミュニケーションが取れる、そういう心理的に安全な環境を作ることで「そうか、じゃあこういうふうに動こう」とか「こうやって助け合おう」とかいうように、お互いを配慮し合えるようになって、心理的安全な環境がつけられるという順番ですね。そして心理的安全な環境を作ると、それぞれが自分の個性を發揮しやすくなるので、その個性を掛け合わせてチームの力に変えていくという考え方です。

結果的にパラリンピックの開会式では、

オーディションに 5,000 人を超える方の応募があり、総キャストが 700 名で、障がいのある方 160 名が出演されました。多種多様な障がいのある方、義足の方とか、車椅子の方とかだけではなくて、自閉症とか重度の知的障がいとか、脳性麻痺のような重度な医療ケアの必要な方も含む 160 名の方が舞台に立つことができました。

それを支えてくれたのが、先ほどのアカンパニストやアクセスコーディネーターといったアクセシビリティの専門のメンバーです。160 名の障がいのある人に対してアカンパニストが 12 名なので、この数字を見ていただければイメージがわくと思うのですが、アカンパニストというのは、障がいのある人の手を取って 2 人 1 組で一緒に動くということではなくて、多様な人がいる環境の中で、安心安全を担保するような働きかけをする役割のメンバーです。

ここで動画を見ていただこうと思います。(映像資料の上映)

TEAM SLOW がこだわったこと

今、御覧いただいたのがパラリンピックの開会式のメイキング映像です。パラリンピックの開会式を作るときに、私のチームがとてもこだわったことが 3 つありまして、それを御紹介しようと思います。

まず一つが、オーディションでキャスティングするということです。こういう大きなイベントだと、どうしても密室でキャスティングしてしまうと思うのですが、私はこのキャスティングをオーディションでやりたかったのです。

それはなぜかというと、私たちが知らないところに、セレモニーに出ることによって、自分を変えたいとか、社会を変え

たいと思っている人が、きっと全国にいるはずと思ったのです。そういう人たちになるべく平等にチャンスをとという意味で、オーディションをやらせてもらいました。

また一つは、どうしてもこういう障がいのある人が出演するショーを作るとなると、障がいのない人が1から9までほとんど全部作って、最後だけ「障がいのある人、車椅子の方はここに立ってください」みたいな感じで作るものが、商業的なものとかでは、すごく多いと思っています。

それは本質的にはものすごくもったいないことをしていると思っています、スローレーベルの活動をしていて思うのは、多様性とは、いろいろな人たち、体の特性とか感覚の特性とかが違うと、みんな視点が違うのですね。その視点が違うことによって、私には思いつかないようなアイデアとかひらめきを、たくさんくれるのです。

それが面白くて私はこれをずっとやっているという感じなのですが、まずは障がいのある人をキャスティングして、その人たちを起点に演出や振り付けを作っていく。そうすることによって、健常者と言われる人たちだけには作れないようなもの、革新的なものを作っていくという、その順番がとても大事だと思ったので、それをすごく気にしながら作りました。

あと一つ、「合理的配慮を学びましょう」とか「障がいのことを学びましょう」という座学のワークショップやセミナーがあると思うのですが、やっぱり座学よりも、障がいのある人と一緒に何かをしてしまう方が早い。一緒に体を動かす、一緒にどこかに出かけてみるとか、それが何よりもお互いを理解し合うのに早いと思っています、このセレモニーのために2,000

人を超える人たちが、半年、一年かけて一緒に何かを共に創り上げる、そうした協働の体験の機会は、本当に貴重だと思います。

そのため、共に作ることに非常にこだわりました。おそらく障がいのない人の9割ぐらいは、障がいのある人と何かをやった経験がないと思います。このセレモニーのキャストやスタッフもそうだと思いますが、このセレモニーをやったことによって、もう今では、それぞれのフィールド、それぞれの地域に帰って行って、その場所をインクルーシブに変えていく推進力になっていると思うのです。

オリンピック・パラリンピックを開催することに対する批判もとても多いですけども、税金を投じて時間をかけて作るわけですから、レガシーというものを意識して、いかにその先に繋がるものにしていくか、人を作っていくか、仕組みを作り、制度を作っていくかという視点で作らなければならないと信じてやっています。

もう1本映像を出します。(映像資料の上映)

リスクのあることにチームで挑む

今御覧いただいたのは、ソーシャルサーカスというプログラムです。これはパラリンピックの開会式を作るにあたって、海外から私たちスローレーベルが導入したメソッドの一つです。

なぜこれを導入したかということ、パラリンピックの開会式は、先ほども言ったように、ものすごく巨大で、ものすごく時間も読めない。また、多くのスタッフとか知らないスタッフもたくさんいる中で、自分の役目を果たしていかなければならないのですが、その環境というのが、先ほ

どお話した、障がいのある人たちが日常的に暮らしている中で流れているスローな時間とは真逆なものなのですね。

もちろん、そういうハードな環境に適応できる人だけを出演させればいいという考え方もあるかもしれないですが、そうすると、どうしても障がいの程度が軽度な方だけに偏ってしまい、「パラリンピックは障がいの軽度の人しか参加できないものだよね」みたいな雰囲気、当事者の方の中に広まってしまうのも非常に残念です。

私たちは「障がいを理由に諦めなくて済むような環境を作る」と思ったからには、障がいのある人たちも何らかの形で、必要なソーシャルスキルとかコミュニケーションスキルとか、環境に適応していく力をつけていかなければならないと思ったのです。

このシルク・ドゥ・ソレイユは皆さんもご存じかもしれませんが、カナダのモントリオールにある大きなサーカスカンパニーで、もう25年以上にわたって、貧困とかストリートチルドレン、麻薬中毒とか、いろいろな社会の課題の中で、コミュニティに入れずにいるような人たちに対して、サーカスのプログラム、ワークショップを提供することで、ソーシャルスキルを身につけてもらい、社会に送り出していくという活動を世界中で長年にわたりやっていて、それを取り入れました。

そこで私たちが一番学んだことは、リスクのあることにチームで挑戦することの大切さなのです。安心安全はもちろん大事なのですが、その安心安全を確保した上で、リスクのあることにチャレンジしていく。そこで一人一人の自己肯定感とか、越えられなかった壁を越えていく成長に繋がるということ、もの

すごく実感しています。

これは地上5～6メートルで脳性麻痺の子が空中芸をしている写真ですが、もちろん危険を伴い、絶対に事故を起こしてはいけないので、本気でコミュニケーションやアイコンタクトを取る。それがサーカスと地上でのダンスとの大きな表現ジャンルの違いなのですが、このリスクのあることにチームで挑戦すること、これはすごく大事なことだと私たちは感じました。



生きづらさを抱えているのは誰か？

パラリンピックが終わって、いろいろ考えることがあるのですが、私が最近すごく感じているのは「生きづらさを抱えているのは誰か」ということです。マイノリティの人たちを指して生きづらさを抱えている人と、ステレオタイプに報じられがちですが、私はそんなことはないと思っています。

このパラリンピックが終わった後に、自分たちの築き上げたアクセシビリティのノウハウを社会にインストールしようと思って、いろいろな企業の方とか業界の方と話したら、どちらかといえば、その方々の方が生きづらそうだったということがあります。合理的配慮とか多文化共生だとか、いろいろやらなければならない。分かってはいるけれども余裕がない。もう自分の業務も人手不足でいっぱい

とか、親の介護の問題とか、皆さんそれぞれに生きづらさを抱えている。そういう社会だと思うのです。

現役世代の生きづらさみたいなことが言われていますけれども、本当にそうだなと思っています。障がいのある人が「人権人権」と言って、「やってくれ、やってくれ」と一方的に主張するのではなくて、お互いの生きづらさを認め合いながら、よりよい社会をどう作っていくのか、よりお互いに生きやすい社会を作っていくことを考えていく必要性を非常に感じています。それで作ったプロジェクトも御紹介させてください。(映像資料の上映)

【上映内容の概要】

多様な人々が1日限りの練習で、ベートーベンの交響曲第九番を合奏する1日完結型のプロジェクト「Earth ∞ Pieces」の紹介。公募でプレイヤーを募り、2024年3月に横浜で開催したワールドプレミアでは、「病気」「子育て」「介護」「仕事」など、様々な事情で合奏に参加する機会を失っていた人を含む、28名が参加した。

次の公演は来年3月にイタリアのミラノで、アレグロ・モデラートという障がいのある人が120名所属している協同組合型音楽学校と一緒に開催することが決まっています。来月世界中から公募でプレイヤーを募集します。「ミラノにはなかなか行けないわ」という方には、12月5日に上野の東京文化会館で、アレグロ・モデラートのディレクターと私で、トークイベントを開催します。

イタリアはインクルーシブ教育の先進国なので、この国ならではのいろいろなアプローチとか、方法論も聞ける機会になると思うので、興味のある方はぜひスローレーベルのホームページをチェックしてください。

もう一つ、今ちょうどデフリンピックが開催されていますが、私はこのデフリンピックの文化プログラムを手がけていまして、今月末に舞台「TRAIN TRAIN TRAIN」の公演があります。今日、たくさん宣伝して舞台裏の話を御紹介しようと思っていたのですが、実はもうチケットが完売したという話を聞いていまして、この舞台裏の話は少し割愛することにしました。

東京パラリンピックの開会式の片翼の小さな飛行機を演じた和合由依ちゃんとか、先ほどの映像で歌っていた坂本美雨さんとか、パラリンピックの開会式のメンバーと一緒に作った舞台公演で、2021年の開会式からもう4年経っているので、ものすごくアクセシビリティ的に進化したパフォーマンスショーをお見せできる機会だと思っています。若干、当日券や追加席が出るとかの話もあるので、興味ある方はぜひホームページをチェックしてください。

また、見に行けない、チケットが取れないという方も、昨日、この「TRAIN TRAIN TRAIN」の乗車ガイドが公開されました、どなたでも見ることができます。舞台には障がいのある、いろいろな特性を持つ人たちがたくさん出ていますが、舞台美術の面とか音楽の面、言葉の面とかいろいろな切り口で、彼らとつくる舞台の工夫の数々を、御紹介するような内容になっています。例えば耳の聞こえない方にとっての音楽とは何かとか、そういったような話がたくさん盛り込まれているので、こちらの乗車ガイドを見て、「TRAIN TRAIN TRAIN」に行った気分を味わっていただけるといいかなと思います。

全ての人が”自分らしく”輝ける世界へ

最後にですが、私たちスローレーベルのプログラムの参加者から、自分らしく

いられる場所に出会えたという感想をよくいただきます。この感想を書いてくれる人は、実は障がいのない人に多いです。つまり障がいのある人たちと一緒にプログラムに参加したことによって、障がいのある人たちの発揮する個性を受け取って、自分もここではみんなと違う自分なりの個性を發揮してもいいのだと感じられるがゆえに、自分らしくいられるということなのですね。

やはりどうしても障がいのある人たちへの配慮とか、障がいのある人たちの居場所を作るとか考えがちなのですが、障がいのある人のためにというよりは、どちらかと言えば、皆さんが自分らしくいられる場所を作るため、どうしたら自分が居心地いいかなということを考えて場を作る。それが結果的に障がいのある人たちにとっても居心地がいい場所になるという、そういう循環をつくれるというのが、一番理想ではないかなと思っています。



<質疑応答>

【質問】

私の自治体では、今年「はたちの集い」の実行委員のメンバーに、公募で重度障がいのある方が加わりました。その方は文字入力でゆっくりと自分の意思を伝え

ることはできますが、オンライン会議の場で、その方とどのようにコミュニケーションをとっていいのか、他のメンバーが戸惑いを感じており、事務局としても見守るだけでは、その方と他のメンバーとの関係性が深まらない難しさを感じています。障がいのある方が地域の取組に参加するにあたってのアドバイスや、成功事例を教えてください。

【栗栖】

世の中の制度やルール、仕組み自体が障がいのない人を前提に作られており、それを変えていく時代に、私たちは今いると思っています。

既存のやり方に、やりにくさを感じている方の視点は、イノベーションのヒントになります。その方にとってのやりやすさを取り入れることで、次の障がいのある方の地域活動への参加につながると思います。

ぜひ、その方と丁寧にコミュニケーションを取って、その方のやりやすいやり方に他のメンバーが合わせてみるとか、一緒に他のやり方を考えてみるという形で、事例を作っていただけると、他の自治体等の参考になりますので、ぜひ頑張ってください。

先駆事例を一つ言うと、佐賀県が「さがすたいる」という取組をしまして、「さがすたいる」で調べていただくと、いろんな事例が出てくるので、参考にしてみてください。